

# 古典語ノト

(三)

## 「つれづれ」の源流

清水雄

はじめに

古典理解の一つの方法として、作品形成のうえに重要な役割を果たしている、いわゆるキー・ワードをとらえ、その語の意味と機能を探究することから入る道がある。それは単に辞書に示す意味の押し当てではなく、具体的にその作品の表象に即して、その語の意味と機能をとらえるという仕方である。このような作業は、必然的にその作品の主題・構想・叙述の展開の相に沿うて行なわれるもので、それ自体がすでに作品理解の段階にはいつているものといふことができる。古典教育の方法としても、このような着眼点が生かされるものと考へる。以上のような意味で、ここでは「つれづれ」という語をとりあげてみたいと思ふ。

以下、「つれづれの源流」「つれづれの展開」「つれづれの深化」と順を追うて考察をすすめることにしたい。なお、この語については、徒然草のどの注釈書にも例外なくふれており、なかにはすぐれた見解も見えてくるが、まだ満足を与えてくれる考説は見当た

らないようである。とくにこの語を考察の対象としてとりあげた単独の論文としては、島津久基氏の「「つれづれ」の意義——国文学と注釈」（「国文学の新考察」所収）がほとんど唯一のものでないかと思ふ。私の「つれづれ」への関心は、この論文によってよびさまされたように記憶する。そのほか、土居光知氏の「文学序説」にもこの語にふれた箇所があり、示唆に富む見解が見られる。

### 一 「つれづれ」の源流

1

「つれづれ」の語は、徒然草という作品の名によって一般に知られている。そして生活語としては今日ほとんど死滅しているもので、まぎれもない古典語の部類に属するものである。徒然草はいふまでもなく、「つれづれなるままに、日ぐらし硯に向かひて、云々」という、この作品の序段の書き出しによって、このように呼ばれるのであろう。いったい、この序段は、その表象を詳細に吟味す

ると、兼好がどのような態度でこの作品の筆を執ったかがうかがえるばかりでなく、考えようによっては、徒然草の本質を探るときに最も有力な手がかりが、この短小な一段から得られるのではないかと思われる。しかもこの序段の一文の中心となる語が、「つれづれ」であることは、改めていうまでもないことである。

このように、「つれづれ」という語から、中世の徒然草、ひいてはその序段をすぐに連想するのはあるが、歴史的にみるとき、この語はそれより古い時代からさかんに使われていたのである。奈良時代にはまだその用例を求めることができないが、平安時代にはいつてからは、わずかではあるが古今集・伊勢物語にすでに見えており、さらに蜻蛉日記以下の女流作家の作品には頻繁にあらわれてくるのである。この女流作家の作品に多く用例を見るという事実は、きわめて興味ある現象といわなければならぬ。少し強い言い方をすれば、この語の表わしているような心情地帯が、平安女流文学の生まれる母胎をなしているといっても、言い過ぎではないであろう。小稿の論述も当然そういう点に及んでゆくはずである。

金田一京助氏の明解古語辞典は、「つれづれ」に対して、「客観的には生活の環境が単調で変化に乏しいことをいい、主観的にはこの環境から受ける閑静な心境をいう語」のように総括的な説明を加えたうえで、つぎのように三義を立てている。

- (1) することがなくて、たいくつなこと。所在ないこと。
- (2) しんみりとして寂しいこと。
- (3) つくづく。つらつら。

(1)の例として徒然草の序段の初めの部分を、(2)の例として源氏物語帯木の巻の「つれづれと降りくらして、しめやかなる宵の雨に」を

あげている。(3)のような意味の用例としては、ずっと下って近世の風来山人の「神靈穴口渡」の第四道行の段から「娘は顔をつれづれと、恨めしそふに打ながめ」を引いている。これは珍しい用例である。同じ段に、「思ひ廻せば廻す程、はらの立のは女のくせ、顔つくくく」と三島より運ぶ箱根の山こへて」というように、さきの「つれづれ」と一見似た意味で「つくづく」が用いられている。思うに前者は、平安時代の慣用句「つれづれのながめ」からの連想で、下の「打ながめ」に引かれた用法であるのかも知れない。それにしても、ここは落人新田義岑・うてな夫婦とまちがえて娘お舟を刺した渡守頓兵衛が、それと知って驚き怒る緊迫した場面であるから、その意味は(1)でも(2)でもなく、やはり(3)ととるのが至当であろう。

(私は、平安時代にはじめて見える「つれづれ」と、奈良時代の万葉集に見える「つらつら」との間に、語源的に共通のものがあるのではないかと臆測しているが、このことについては今はっきりしたことはいえない。ただ「神靈穴口渡」において、「つれづれ」が「つらつら」と同義に使われていることは、この臆測にくらからの根拠を与えて、れるのではないかと思っていることを付け加えておく。)

(3)にはこのような問題がこざれているとしても、いちおう特殊の場合と考えておいてよいであろう。そうすると、その前の総括的な説明と、具体的な意味としてあげられた(1)(2)との間にはどのような関係があるのであろうか。それを吟味してみると、だいたい、(1)は説明の前半にかかるところが多く、(2)は後半にかかるところが多いと見てよいかと思う。このことは、そのあとにあげられた具体的な用例を見てもいえるようである。しかし、もともと「つれづれ」

の語は、主観・客観の両面にかかわる意をもち、結論的にいえば、主体の心身のある状態をあらわす語であると見られるものである。その点を明らかにすることが、実をいうと小論のおもな部分となるはずであるから、ここではこれ以上ふれることをひかえたい。

## 2

さて、古語辞典に「つれづれ」の意味を右のように解していることは、この語に対する従来の注釈書・研究書の諸説を要領よく整理した形のものとなり、大づかみなところでいうと、だいたい妥当な見解と見るべきであろう。しかし、「つれづれ」は、おいおいふれてゆくように、もともと人間存在の根源に根をおろした語であるところから、辞書的な解説には不向きな性格を持っている。その点からいうと、これまで深切明確にその本質を指示してくれた学者の論考は、ほとんどなかったといつてよい。それはこの語が解説を超えた領域に深く根を張っていることによるのであろう。

思うに、「つれづれ」が、主体の心身の或る状態をあらわす語であるところから、主観的な心理状態の方に重さがかかるか、客観的な身体状況の方が主になるかによって、この語の意味も機能も変わってくるし、またそういう心身の状態は時代的社会的環境からたえず影響をうけるものでもある。さきに私は、「つれづれ」が人間存在の根源に根をおろした語であるといったが、このような自己の内部にひそむ人類永遠の謎に眼を向ける主体の態度いかによって、主観的な心情の内容にも相違があらわれてくるのは必定であるが、それはさらに、客観的な身体状況をも規制しないではおかない。

このようにみてくると、この語は一方では主体の世界観により、

他方では主体の生きた時代的社会的環境により、その意味と機能を異にしてくるといわなければならぬ。ここに「つれづれ」の意義の探究の方法についてのめどが暗示される。それは一つは歴史的観点であり、もう一つは作家的観点である。すなわち、一方では語義に歴史的変遷が見られるとともに、他方ではそれぞれ世界観を異にする作家の人生観照による相違が見られるという事実に着眼して、方法上の工夫がなされる必要があるということである。すなわち、平安時代の女流作家が頻繁に使った「つれづれ」と、中世の隠遁作家兼好の用いた「つれづれ」との間には、意味と機能のうえに相当のちがいが見られるが、これは歴史的條件とともに個人的条件にもよるものと思われる。同じ時代でも、紫式部日記と和泉式部日記とは、やはり異なったものが看取されるのは、両作者の性格や経験にもとづく人生観照の相違からきていると考えられる。

このように、時代により、作家により変遷相違が見られるとしても、なおかつこの語を一貫して流れる不変のものがあるに違いない。それは何であるか。推測としてでも、それを最初にとらえておいて、以下の考察の見直しをつける必要がある。

## 3

徒然草の第七十五段は、つぎのように書き出されている。

つれづれわぶる人は、いかなる心ならむ。まぎるる方なく、ただひとりあるのみこそよけれ。

ここで兼好は、「つれづれ」をわぶる人の態度を斥けて、それをよしとする態度をとっている。その後につづく叙述を参考することによって、右の引用部分の叙述から理解されることは、「つれづれ」

とは、主体の「まぎらるる方なく、ただひとりある」状態をさす語であるということである。「ただひとりある」は、ぼつねんとひとりいること、ひとりぼっちであることである。さらにいえば、「孤独」であることをいう。「孤独」は、主体の状態についていったのであるが、そういう主体を環境の側からとらえるとすれば、「まぎらるる方」のない、すなわち、用事も話相手もない、手もちぶさたな状態をさすものとなる。それをかりに「閑暇」ということはよぶことにする。主体の「孤独」は、「閑暇」な状態においてきわだってくる。そのような主体が、何かの折に、自己凝視によって、みずからの「孤独」に気づくとき、たちまちにして深淵のような「孤独感」におそわれるのである。

このように、主体が、かかわるべき用事も話相手もなく（閑暇）、外界から隔絶した「孤独」な状態にあるとするのは、主体の状態の客観的把握であるが、ひとたび自己凝視によって、みずから「孤独」な存在であることが内省されたとき感ずる「孤独感」は、主観的認識のうえに立つものであるということが出来る。主観・客観にまたがる、主体の心身のこのような状態を、「つれづれ」と呼んだのではなからうか。そうすると、時代と個人を通じて一貫する「つれづれ」の意義として、「孤独——孤独感」があると見ることが出来る。それは、孤独性は社会性とともて人間本具の根本的性格であるからである。このような見通しをつけるのに、一つの有力な指針となったのは、斯波六郎先生の名著「中国文学における孤独感」に見える見解である。斯波先生は言われる。

○ かく人間は元来社会性をもつとともに、また一面最初から一人ぼっちの性格をもつものである。……人間はこのように、一面

「社会性」をもつとともに、一面では「孤独性」をもっているのである。「孤独」なるが故に社会を作るともいえるのである。

(三—四頁)

○ 然らば「孤独感」の奥底には何があるのであろうか。それは生命の不安感ではなからうか。人間は何時でもその心の隅に、動物的な、生命の不安感を藏していて、それがもたくなって、「孤独」を感ずるのではあるまいか。(同、四頁)

○ ところで、不安感は一而、憂愁となって表われる。それはまた苦悩でもある。すなわち、人の生れながらにして、「不安」をもつことは、「憂愁」・「苦悩」をもつことであるともいえるのである。……かかる「憂愁」・「苦悩」——「不安」が根底となつて、そしてその不安が誰にも通じないで自分ひとりのものだと感ずる時、「孤独」という感じがわくのではあるまいか。(同、五—六頁)

○ さて、孤独感とは、他人から拒否された時、或いは拒否されたと感じた時、換言すれば、自分の思いが他に通じようもないと感ずる時の一つの心理状態である。更にいえば、自分の思いが他人に通じないで、自分だけがとりのこされたる感じをもつて、自分で自分をなぐる時に生ずる心持である。だから、自己凝視の時の一種の感じであるともいえよう。(同、七—八頁)

○ われわれにはもともと、このような自己凝視——孤独感の生ずる——をする習性があるのである。しかし忙しい世の中なので、外物に捉われて忘れられていたり、或いは何ものかにかすがることによつて消されているのである。ところが何かの機会に、ふと自己凝視をして、孤独を感ずることがあるが、そういう感じをおこ

させる原因そのものにいろいろの種類があり、生じた孤独感そのものも多種多様であって、これらを精密に、分析して説明することは頗る困難である。かかる問題の研究は恐らく心理学の分野に属するのであろう。(同、八―九頁)

引用が長すぎたきらいはあるが、「つれづれ」の意義を、人間本具の「孤独——孤独感」の角度からとらえようとするとき、斯波先生の説を全面的に肯定し、それを理論的根拠として考察をすすめるのが、最も正しい探究の方途であると考えたからである。

(この項 つづく)

(本学教授)